

はなのはなし——説話と表現(1)——

竹村 信 治

一 端の話

この二三年、公民館等の文学講座で、説話について話す機会が何度かあった。受講者からの強い要望があつてと云つたことではもとよりない。『源氏物語』をはじめとする王朝物語や和歌(万葉・平安和歌・新古今)、『平家物語』などの軍記、能・狂言、芭蕉、近松、西鶴、近代文学(詩歌・小説・作家論)、さらには短歌、俳句、郷土の文学・民話伝説などの定番企画を一通り終え、そろそろ手持ちの駒がなくなつた、あるいはちよつと目先のかわつたテーマで定番第二クールへの間つなぎにしたいといつたことがまずあつて、人脈をたどつていくうちに筆者のところに向り着き、結果、説話をテーマにすることになつてしまつたといふのが真相らしい。そうした事情によつていたのであろう、挨拶(面接試験?)に來られる担当者は、「不勉強で申しわけないが、企画書を書く必要があるので、『説話』というのはどんなものか教えてほしい」とたいてい尋ね、「おそらく

聴きに來られる方々もよく分からないでしようから、そのあたりの概説から始めてほしい」とのアドバイスを忘れないう。

説話を主たる専門としてきた筆者は、こうした質問やアドバイスを前に、まことに不勉強だと正直いつていつも思う。が、このさい告白しておけば、一方で、この領域の社会的不認知を思い知らされて一抹の寂しさを感じてもいるといふのがいつわらざるところだ。しかし嘆いていても始まらない。そこで氣をとりなおし、布教のいい機会とばかりに「説話とは何か」を語ろうと意氣込むわけだが、これはそう簡単にはいかない。

もちろん、一口にいつて「お話」のことです、といつて止めておけばことは簡単だ。しかしそれでは、担当者の腑には落ちようがこちらの腑は空っぽのまま、胸の内にはなにやら△説話▽を裏切つたような後ろめたさもわだかまる。かといつて、たとえば現在の説話研究の方法や視点をほぼ網羅している「説話の講座」(勉誠社刊)全六巻の目次を示

して、ほぼ二十年前の『日本の説話』（東京美術刊）全七巻と比べながら、〈説話〉概念をめぐる史的展開、あるいは説話の生態に関心を寄せその言説としての機構や機能の解明に向かっている今日の研究状況（拙稿「説話研究の現在」、『国文学』一九九五年10月号）などを述べたところで、担当者さらなる困惑に導くだけのこと。困惑は不勉強への懲罰と、能面ならぬ仏頂面して説話や説話研究への忠義をはたすのも一興だが、おそらくはムラの言葉の無能ぶりを思い知らされ、いつそうの寂しさに心苛まれるのがオチであろう。

さてどうするか、ここが思案のしどころだ。『お話』と云って不本意ならばムラの言葉の翻訳でいく、それが誠意でもあり務めでもあろう。しかしこれには具体例が必要だし、時間もかかる。また担当者の望むところでもあるまい。翻訳は講座の受講者に向かってすることで、彼のほしいのは企画書に書く言葉なのだ。そこでいう。

—— 一口に云って『お話』のことです。高校時代にお習いになった『今昔物語集』とか『宇治拾遺物語』などに入っている話、アレです。芥川龍之介などの近代作家が『今昔』や『宇治拾遺』に取材して多くの作品を書いたことはご存じです。ね。平安時代や鎌倉時代にはこれらのほかにも多く説話集が編まれていますし、個々の説話は歴史資料や宗教関係の資料など説話集以外のさまざまな文獻に見えています。絵画化もされていまして、『信貴山縁起』や『伴

大納言絵詞』といった説話絵巻、法然・一遍などの生涯を描く高僧伝絵巻、寺社縁起・参詣曼陀羅などが近年注目されています。これまでの講座で扱われた神話・物語・日記・軍記・謡曲なども説話と無関係ではありません。それらには、説話がモチーフを提供したり、素材として利用されたり、そのままの形で取り込まれたりしていますし、和歌にも説話を踏まえたものが多くあります。『伊勢物語』なども歌物語というけれど、説話と呼んでもかまわないし、御伽草子、子供のころお読みになったでしょう、あの一寸法師や鉢かづき、浦島太郎の話なのですが、あれも説話と無関係ではありません。現実起こった出来事、実際にはそうとはかりはいえませんが、ともかく「ありしか無かりしかは知らねども、あつたとして聴かねばならぬぞよ」と、事実であることを前提に語っておりまして、その内容からは、平安時代や鎌倉時代に生きた人々の生きざまや実際の暮らしぶり、ものの考え方や見方といったことが窺えます。いってみれば、こうした古人の生きざまや表情を生々しい事実として伝えてるのが説話でして、そこから古えの人々の生活や風俗、信仰、世界観を手ざわり確かに知る。ことのできるのが、魅力なんです。ね。登場人物も天皇、貴族から武士、僧侶、庶民などの各層に及んでおり、さらに神仏や鬼、悪霊、天狗、はては動物たちまで大活躍というところで、彼らの生き生きとした姿は読んでいて楽しく、きれいな事ばかりの物語や和歌とはちがった古人との出会いを体

験させてくれます。さらに、ちかごろはやりの文化人類学などでは、素材や話の型などに着目しての構造分析から、日本人の認識や世界像の原型、基層を掘り起こすといったことも行われていまして、説話への興味は尽きません。

まあ、物語や和歌などところがって文章は平易ですし、出来事を人物の行動本意に語っていますので筋がたどりやすく、内容も、なにしろ説話の本質は「奇異（あさまし）」の一語に集約できるといわれているくらいで、常識ばなれした驚くべき話題ばかりですから、受講者の方々にも興味をもってもらえるでしょう。平易、明解、面白い。しかもリアルで、主題は人間。これが説話だ、というわけですが、自分で読み解いたり人間の生き方を考えたりといった愉しみ方をしていただけでしょうか、生涯学習の一環としての文学講座にはふさわしいかもしれませんね。……どうでしょう、「日本のはなし——〈説話〉が語る古人の表情——」くらいのタイトルで。

*

これまでの経験によれば、このような解説でたいはいは納得してもらえらる。何のことはない、担当者の読書体験に訴え、これまで企画されてきた講座との関係を説いて警戒心を解き、さらに文化や文学諸ジャンルとの関連の言い立て、「生々しい事実」「世界観」「古人との出会い」「ちかごろはやりの（文化人類学）」といった殺し文句の羅列、日本人の大好きな「日本人論」「原型・基層・始原」論への展開

の灰めかしなどで関心を引き、歓心を買ひ、おまけに講座タイトルまで用意して駄目を押そうとしているわけだ。〈説話〉についても、近代の作った価値幻想にすぎないハリアリティ〈人間〉をふりまわし、各時代の世相、生活風俗、ものの見方や考え方の投影、さまざまな階層の人間の生き生きとした姿の活写、行動の文学、驚きの文学……と、なかば手垢にまみれた〈説話〉観を繰り返しているにすぎない。しかしこのような解説で納得してもらえるのは、おそらくそれが担当者、そして彼が経験的に把握している受講者（『企画パンフレットの読み手』の古典をめぐる興味・関心・意欲に応じるところがあるからだろう。

ともあれこうして企画担当者を安堵させ、ついでにこちらの胸も撫で下ろし、それではよろしくと互いに挨拶を交わして送り出したあと、筆者はいつも後味の悪さをタバコの味で紛らし、くすぶる思いをタバコの火と一緒に採み消すことになる。歓心を買うために弁舌を弄したことへの空しさもあるが、それ以上に、またやってしまったという自分への裏切りを悔いる思いが広がってくるのだ。

上に紹介した〈説話〉解説は、見たとおり、世上に行われ市民権を得ている〈説話〉観、別の言い方をすれば現代人の古典観を迎え取って造作される〈説話〉観を紹介したものである。けれどもそれはあくまでも企画書向けの宣伝文句、実のところをいえば筆者の〈説話〉への関心の寄せ方と同じではない。後味の悪さはこの、いわば公的〈説話〉

観と私的の説話、観とのズレに由来する。そこでその口直しとばかりにタバコをのむわけだが、「おぼしきこといはぬは腹ふくるるわざ」、くゆり火の火種はなお残っていて、講座では口角に沫を溜めて私的の説話、観をまくしたてることになる。さすがに受講される方々は大人で、看板の偽りや誇大広告に目くじらを立てたりはしない。子供のわがままを慈しみをもって見守る親といった趣きで、それなりに興味ありげに聴いてもらえる。以下に「いひつづくる」のはその一端、筆にまかせつつあぢきなきすさびにてかつ破り捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず」（徒然草】第一九段）。

二 花の話

●花と稚児と僧

教科書その他でおなじみの説話に次の話がある。

これも今はむかし、田舎の児の、比叡の山へ登りたりけるが、桜のめでたく咲きたりけるに、風の激しく吹きけるを見て此の児さめ、と泣きけるを見て、僧のやはら寄りて「など、かうは、泣かせ給ふぞ。此の花の散るを惜しうおぼえさせ給ふか。桜は、はかなき物にて、かくほどなく移ろひ候ふなり。されども、さのみぞ候ふ」と慰めければ、「桜の散らんはあながちにいかせん、苦しからず。我がてゝの作りたる麦の花ち

りて、実の入らざらん、思ふがわびしき」といひて、さくりあげてよゝと泣きければ、うたてしやな。

現代語訳を付すまでもあるまい。ところは比叡山、満開の桜に風が吹き寄せ、涙を落とす稚児がいる。これを目にした僧がいて、一人合点に和歌的感興を募らせ、言葉を尽くして慰める。が、田舎出の稚児は桜ならぬ郷里の麦が御心配、それゆえの涙と明かしてなお泣きじやくる。結果、僧の感興、つひにむなしくなりにけり。ご存知、『宇治拾遺物語】第13段「田舎児桜ノ散ヲ見テ泣事」の一件である。

ところで、この話をどう読むかが、ふつう大きくわけ二通りの読み方が行われている。そのうちの一つは末尾の「うたてしやな」に着眼してのもので、典型は次の解説。

「うたてしやな」と感ずる主体は誰か。直接には僧であるが、間接には作者でもあり、さらに読者でもある。子供の泣くのは僧が予想したような、優雅風流なロマンスズムのためではない。その案外ちゃっかりした現世主義に、僧のせつかくの感動がどんでん返しを食うおかしさ、みじめさ、それがこの評語であり、一篇のやま場でもある。（日本古典文学全集頭注）

思惑違いに「田舎の児」を持たえます僧、「うたてしやな」はその当惑ぶりを代弁したもので、さらに「作者」自身そうした僧に寄り添い、読者の共感をも前提にして語っているという。そして「うたてし」Ⅱ不快の原因は価値観の相違、つまり和歌的感興を生きる王朝的美意識の体現者（口

マンチスト)が「我がてゝの作りたる麦の花」の如何を思う現世主義者(リアリスト)と価値幻想を共有できなかった失望にあり、王朝の価値を優位におく「作者」は、「どんでん返しを食う」僧の「おかしき、みじめさ」を豁然気味に語ることで、鄙の文化的劣位を苦笑まじりに再確認している、というわけである。こうした理解は「人はそだち」といった教訓的モチーフに収斂させていく読解(日本古典集成・頭注)とも一連なりのもので、ここからは、平安鎌倉期における和歌的美意識に優位性を与えるもの見方や考え方、あるいは都と田舎との文化的落差、都人の地方への差別的眼差しといったことなどが、話題の伝える実体的な事柄として読み取られ、学ばれていくことになる。

いま一つの読み方は西尾光一氏『中世説話文学論』(稿書房刊、一九六三年3月)が説く次のもの。

しかし、この説話には、そうした都市的・貴族的なもの、農村的・庶民的なものとの対立という側面だけでなく、単に単純に解釈してしまえない、僧院におけるものなものがつきまとっているように思う。泣いている児にそつとちかづいて慰めた僧の態度や気持の中に、叡山のような大僧院における僧の児に対する関心や意識、それが発展すれば、同性愛の児物語になるような生活感情の芽生えを読み取るのは行き過ぎであるか。「うたてしやな」という評語も、単に都市貴族的な「ものあはれ」を田舎の児が理解できなかったからという

だけではない、せつかくの僧の同情と関心とが、順当に受け入れられなかったことについての「うたてさ」を含んでいるのではなからうか。

委細をつくした説明に解説は不要だろう。「僧院のにおい」を伝える話題、との△読み▽である。この△読み▽は、本文中の、児の涙を見ての僧の振る舞いを「やはら寄りて」(そつとちかづいて)と表現している点、僧の会話部分に「ずいぶんと丁寧な待遇表現が用いられている点(本話の稚児は当時多くあつた上級貴族出身者ではなく「田舎の児」である)に、おそらくは注目してのもの。その蓋然性は、たとえば岩田準一氏『本朝男色考』(一九七三年、初出は一九三〇)の「犯罪科学」連載)、近くは季刊『文学』一九九五年冬号「男色の領分——性差・歴史・表象——」特集に寄せられた諸論文、特に五味文彦氏「院政期の性と政治・武力」土屋恵氏「中世寺院の児と童舞」の示す諸事実が、これをよく支える。説話でいえば中関白道隆息隆家の孫で天台座主にもなった増普と呪師小院の関係を伝える『宇治拾遺物語』七八—二「一乗寺僧正事」、鳥羽院第五皇子覚性法親王の逸事を語る『古今著聞集』好色第十一「仁和寺の童千手参川が事」や和歌第六「仁和寺の佐法印、山吹着たる童に歌を贈る事」などがその例である。僧に仕える児は僧尼令の「凡そ僧は、近親郷里に信心の童子を取りて供侍することを聴せ」に法的起源をもって始まる(上記、土屋氏論考)が、「院政期から中世に到ると、稚児は寺院内

の特殊風俗としてとどまることなく、その身体が一つの文化発生源として燦然と輝き、社会全体を稚児崇拜の熱狂へと導いていく。男色風俗の一般化とともに、僧侶の男色もはじめて表現手段を獲得することになった」（神田龍身氏「書誌と解題」、上掲季刊『文学』所収）のである。本話題はそのような社会風俗の一場面として、その「熱狂」の具体を描きとつたものとしてよい。その場合、あるいは室町

時代物語「足引」で児の実父が息子を託す僧（代父）を替えるなどして僧と児との関係に介入することがあったのを参考にするれば、そうした三者の関係がここに写し取られているとしてもよいのかもしれない。いづれにしても、こうして、ここからは実体としての「叡山のような大僧院における僧の児に対する関心や意識」、ひいては中世初頭の「日常茶飯の生活の中で行動する人間」の姿が垣間見され、これを敷衍して「人間の姿を確かにとらえる」「宇治拾遺物語」という作品観や△説話△の文学的特質（『説話的発想』）が指摘されることになる。

●話題性と表現と

さて、これら二つの△読み△のいづれを是とするかについては、一方は人物形象とその配置に、他方は展開あるいは語り口に根柢をもつてのことであり、にわかには決したいものがある。そこで、多くのばあい、両者は披露の場に応じて使い分けられるということになる。すなわち、

美意識や価値観といった言葉の響きに目の輝く聴衆が多い場では前者が採用され、世態風俗、特に僧院の性生活といった陰微（淫靡？）な話題に身を乗り出すむきの多い場では後者が、鼻を蠢かしつつ語られるというわけである。筆者もかつてはそのように扱った。けれども、これらの△読み△が、はたして一話の表現を不足なく言い当てたものといえるのかどうか、疑問がないわけではない。

たとえば、かりに二つの△読み△がともに成り立つとして、それぞれの△読み△が思い描く叡山僧の姿をあらためて眺めてみる。すると、前者は王朝的価値観に立脚した和歌的情趣の体現者像、後者は「児に対する関心や意識」を抱く男色者、となる。和歌的情趣の体現者にして「児に対する関心や意識」を抱く叡山僧、それが一話の語る人物像である。これはすこし変ではないだろうか。

いや、すこしも変ではないという意見もあろう。奇妙に感じるのは和歌的情趣体現者への幻想、あるいは同性愛者への偏見による、また院政鎌倉前期の美意識や時代風俗への無理解に由来する。作品がこのような人物像を描く以上、そこに古人の表情を窺い、そうした人物の存在、時代の様相を了解して歴史への理解を深めることがなにより大切、というわけだ。前節に示した△説話△解説にしたがえばそういうことになる。しかしそのような態度は、説話の扱う事柄や出来事（『話題』）と説話に語られていること（『表現』）を同一視したもので、説話の△読み△として

おそらく十分ではない。

説話の扱う事柄や出来事と語られていることは、しばしば誤解されるが、必ずしも同じではない。このことは、一般に説話が——説話に限らず、われわれが譬え話を引いてなにかを説明する場合にはいつもそうなのだが——、話題部分（物語部）とそれへの意味付けを示す部分（評語／評論部）で構成されていること、しかも多くの場合に話末に示されるその意味付けが、語られる場（書かれている場合は説話文献資料）に応じて可変的であることを思い出せば、すでに明らかだろう。たとえば、験者として著名な浄蔵の、近江守女との交情譚（『大和物語』一〇五段、『今昔物語集』卷三〇第3話）。この話題は、『三國伝記』卷六第9話で、二人の子を膝に据えながら傾いた八坂の塔を祈り直した後日譚ともなつて語られ、「豈世ノ愛着色貪ノ義ト同ジカラシヤ」と評される。この評は、『今昔物語集』卷十一第24話の久米仙人や卷三十一第3話の湛慶阿闍梨譚などと同様、墮俗の後なお験力衰えぬ「威験高德」者譚として本話題を意味付けたものである。ところが一方、この話は、仏道修行者の魔縁としての女性を論ずる『発心集』卷四第5話では「日本第三の行人なれど近江守ながよが女に契りを結べり」と梗概化され、「媚びたる形を見て目を悦ばしめ」た「智者」の代表として扱われている。こうしたことはおよそわれわれが目にする説話のすべてにみとめうることで、詳しく説明するのも恥かしいほどだが、これらによつても、

話題はいつも、説話が語られ書かれるまさにその時に、その場に応じて何らかの意味の衣をまとうことが知られよう。そこで意味の衣をまとうせるのはほかならぬ△語る主体▽だ。すなわち、説話は、△語る主体▽が、彼の世界観やそれと深くかかわる心意にそくして、あるいは彼によつて了解／付与／創造された場の性格にそくして、あるいは彼によつて把握／想定／創出された聞き手（読者）の態度にそくして、話題を意味付けつつ語つたものである。このことは付託される意味を明示的に語る場合も、そうではない場合も、同じことだ。いわゆる評語や評論をもたない説話でも、意味は語り口に響いている。説話はその全体が、いわば意味の実現過程として語られ書かれているのである。このことは、説話が、話題についての話題、いいかえればテキストに対するメタテキストの位相にあることを教える。したがつて、『説話に語られること』すなわち説話の表現は、△語る主体▽が話題をメタ化するその局面に深くかかわつており、それは話題性そのものとは別の位相にあるというほかはない。

『和歌の情趣の体現者にして「児に対する関心や意識」を抱く叡山僧』これは話題にかかわることである。一話はたしかにこの叡山僧の行状を話題にしている。それはまた、その時代の美意識や価値観、また風俗、世相と無関係ではないだろう。しかしこの取材された叡山僧の行状あるいはそこから窺える価値観や風俗を、そのまま一話の表現とす

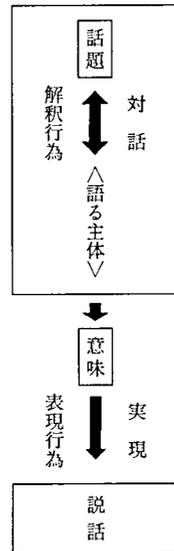
することはできない。それらは、あえていえば、話題にすぎない。一話の表現にとって問題なのは、見たように、話題のメタ化の局面だ。つまり、△語る主体▽がどのような視線をもってこの話題を見出し、それとどう向き合い、どのような対話を交わし、そこでどのような意味を発見／付与し、どのような話題としてこちらに投げかけているのかということだ。これを問うことなしに「僧院のおい」を嗅ぎ取ってニヤニヤしたり、「日常茶飯の生活の中で行動する」「人間の姿」を垣間見たりするばかりでは、話題と向かい対話する「人間の姿」は視野に入ってきてまい。すなわち、ついに、表現と表現にかかわる「生々しい人間の姿」に出会うことはないだろう。

しかし、どうなのだろう、はたして一話にそんな出会いの目印、メタ化の局面を窺う手がかりは残されているのだろうか。こんな声が聞こえてきそうだが、先に、「すこし変」ではないかといったのは、そこにこのメタ化の匂いを嗅ぎつけてのこと。けれどもそのはなしに進む前に、今すこしはなしておきたいことがある。それは、ほかでもない、メタ化に挑む「生々しい人間」の正体についてはなしだ。

●表現と「欲望」と

ここまで、説話の表現について、それが、話題をメタレベルで扱い、これと向き合い対話しつつ意味を発見／付与する△語る主体▽の営みにかかわっていることを述べてき

た。それによれば、説話は、△語る主体▽が話題への解釈行為によって見出した意味を話題の再構築によって言語的に実現したもの、ということになる。これをモデル化して図示すると次のようになる。



モデル図はとかく説明不足になりがちで、補注を付けたくなるものだ。ここでも、発見／付与される意味の素性、またそれにかかわって△語る主体▽が棲まう意味場もしくは言語ゲームの様態、あるいはそこで彼が占める位置や構えが気になるところだし、さらには、話題内容そのものの出来事性あるいはそこにすでに付託されている意味の△語る主体▽への働きかけの問題、語り出される場の性格とその磁力のあれこれ、聞き手（読者）の作用のくさぐさ、解釈行為や表現行為のさなかで△語る主体▽を、また意味場や言語ゲームを、また発見／付与された意味を、ゆさぶりつづる言葉そのものの侮りがたい力について、等々、書き込みたいことは山ほどある。それらはしかし、後にあらためて取り上げることとして、ここでは対話と実現の過程にひ

められた「欲望」について注記しておくにとどめたい。

解釈と表現の営みのうちにひそむ「欲望」、いくぶん唐突なこの問題設定の必要を了解するためには、たとえば、次のニーチェの言葉（『善悪の彼岸』九）などが有効なのかもしれない。

（哲学者は）哲学につねにおのれの描く像になぞらえて世界を創造する、他の様にはなしえない。哲学とはかかる暴君的衝動そのものであり、力への意志への——「世界創造」への——第一原因への、もつとも精神のなる意志である。

あるいはガヤトリ・C・スピヴァック『文化としての他者』の次の言葉はどうだろう。

説明への意志とは自己と世界とを所有したいという欲望の徴候にほかならない。

日本の説話を云々する文章になにやら座りの悪い断章を引いたのは、ほかでもない、話題についての話題としてテキストをメタ化する説話という表現の、その『説明』の言語行為のうちに行われていることをよく知るためだ。

それにしても「暴君的衝動」といい「欲望」といい、まことに穏やかでないことばがとびかっている。しかし、ここでいわれているのはそれほどわれわれの日常に縁遠いことではない。たとえば夫婦喧嘩。この、日常のささいな出来事に端を発し、やがて価値観の相違、性格の不一致にまで行き着いてしまう哲学論争は、まさに「おのれの描く像

になぞらえて」「創造」されたそれぞれの「世界」像の対立そのものとして、相互の「暴君的衝動」が火花を散らして衝突する生々しい現場といつてよいものだ。そしてそこで展開される互いの立場の主張強弁は、論破をとおして妻／夫という名のそれぞれにとっての他者をそれぞれの「世界」に位置付けて支配し、さらにこの侮りがたい他者との関係を結び直す中で自己をあらためて「所有」しようとする「欲望」の、「徴候」どころか露骨なあらわれ以外のなものでもない。なるほど、『亭主閨白』、『嚙天下』はそれぞれ「暴君」支配の別名、対立と衝突のはてに確定した勢力分布を表わす言葉にほかならなかった。いやいやそんなごたいそうなことをしているわけではない、とおっしゃるむきには、相手をやりこめた時に一瞬あじわう征服感や優越感、そしてだいに湧きおこるいたわりの情愛、あるいはやりこめられた時の屈辱感やそこからしばらく引きずることになる厭世感などを思い出していただこう。それらは、夫婦喧嘩が自己の存在と「世界」像を賭けた対立、双方の「所有」をめぐる「欲望」の葛藤だったことの、まぎれもない証しだろう。利害見解の対立葛藤場面にあらわになる言表の本性。その実際は、夫婦間のみならず親子間、兄弟間をはじめ職場の上司部下間、同僚間、さらには論壇、学会、経済界、政党間、民族間、国家間、等々、いくらでもわれわれのまわりに見つけることができる。もつとも、それらは見やすい例にすぎず、「自己と世界とを所有したいという欲

望」は、こうして今のべている筆者の言葉も合めて、言表のすべてに孕まれているというべきだった。親の子供へのなにげないことば、教師の発話、テレビ・ラジオのニュースキャスターやレポーターのコメント、政治家の政見、ジャーナリズムの論評……。それらの発言のすべては、対立葛藤の場面でのように明瞭ではなく、したがってほとんど気付かれないのだが、それぞれ、すでに意識無意識のうち側で形作られている「おのれの描く像になぞらえ」た言表と呼ぶほかないものだ。そしてまた、そうした言表は、それぞれ自己と自己をとりまく世界を「おのれの描く像になぞらえて」意味付け了解し、それをおして他者を飼いつくらし、同一化し支配しようとする、すなわち自己化しようとするものである以上、「自己と世界の所有」を志向する行為以外のなにもでもない。さまざま言表の表出のうちになうごめく自己化の志向とその権力性、これを「暴君的衝動」「欲望」とよぶ。

さて、こうしてニーチェらの発言から言表の本性を省みると、それは、説話を語るときの言語主体の営みの内実を、これ以上のぞめないくらいによく説明しているように思われる。説話もまた、「他の様にはなしえない」八語る主体√が話題と向き合い、それを「おのれの描く像になぞらえて」「創造」しようとした「世界」であった。また、現実のモノやコトの由来Ⅱ八おこり√を説き、何ごとかの事例Ⅱ八ためし√としてそこで語られようとしていることを明

らかに示す、そうした説話の説示性機能に注目するならば、説話はまさに、「説明への意志」をもつ八語る主体√、「自己と世界とを所有したいという欲望」の実現過程そのものとしてあった。そこでは、説話の扱う話題（事柄）が、いつも八語る主体√の「暴君的衝動」「欲望」の眼差しにさらされ、そのもとで変形され、あらたな「像」を結んで差し出されている。そして説話は、話題を媒体として語りに「欲望」をひそませ、「欲望」に根差した何かをあらためて／あらたに表現として創り出している（逆にいえば、何かをあらためて／あらたに表現として排除しようとしている）のである。ここに、メタ化の営みにひそむ「欲望」がいかに説話の表現にとって根源的なものであるかが明らかであろう。したがって、説話の表現を読むとは、話題性はもちろん、明示的な意味付けを確認することに止まるものでもなく、むしろ、意味の衣をまとわせつつ「像」を差し出す言表行為の、その根源にある「欲望」のかたちや位相を問うことではなければならない。また、語りにひそむそうした「欲望」によって何が創造され何が排除されようとしているのかを問うことでなくてはならないだろう。

ところで、説話の表現およびそこで営まれる言語行為について、このように考えてくると、説話を、扱われている事柄や出来事つまり話題性にそくして把握し、説話を標本化して扱う態度は、ひどく説話を物象化したステイックな構えのように見えてくる。そして説話が語られるまさに

その時に話題にさしむけられた△語る主体∨の「欲望」についての配慮をいじめるしく欠いたもののように思われる。その、説話の標本化をこそ求めるいわば性急な知識化志向は、それこそ現代人の古典テキストへの「欲望」の顕れなのでもあろうが、こうした「欲望」への配慮の欠如は、表現の基底にある「欲望」のかたち、ひいては△語る主体∨の棲まう言語ゲーム、意味場を窺う契機を奪うばかりでなく、「欲望」と話題とが拮抗し対立し相互に働きかけあう怪しい関係、さらにいえばその実現過程で発揮される△ことば∨の力——聞き手や読者にとりうだけでなく△語る主体∨の「欲望」にも働きかけ動揺させるその悔りがたい力——への視界をも閉ざす。いいかえれば、われわれの△読む∨愉しみ——△語る主体∨の「欲望」、言語ゲームや意味場を読み込むところに映し出されるわれわれ自身のそれらを、疎遠化し異化しつつ眺める愉しみ。さらには△語る主体∨やその「欲望」の動揺にわれわれ自身の可能性を見いだす愉しみ——をも、それは閉ざしてしまう。

もちろん、テキストはいつも読者の前に開かれているのだから、説話を標本化し古典を知識化するこうした態度をもつて説話に対することがあつても一向に差し支えない。差し支えないが、その場合には、読み取られた事柄や出来事と説話の表現とが別ものであることを、きちんと弁えておくべきだろう。事柄や出来事の表相的な確認から、たまに見出される世相風俗世態を珍しそうに言い立てたり、

現代人の興味関心にあわせて想像（創造）した価値観や美意識に好悪を云々したり、芥川龍之介の視線（『今昔物語集鑑賞』一九二七年）に自らの視線を重ねて登場人物の行状に「生々しい人間」を思い入れたっぷり実感して感動したり、彼らのものの見方や考え方に勝手に同化異化してアイデンティティー探しの遊びに興じたり、そうしたことは自由だが、まちがっても、そこから作品を論ずるといったことだけはしないようにしたい。「今昔物語」は……野性的の美しさに充ち満ちてゐる」といったり、「日常茶飯の生活の中で行動する」「人間の姿を確かにとらえる」「宇治拾遺物語」などといわないようにしたい。論ずるのであれば、「生々々々しさ」を感じさせる話題性、話題から摘出されるものの見方や考え方、「日常茶飯の生活の中で行動する」「人間の姿」といった事柄が、説話の語られるまさにそこにおいて、どのようにとらえられ、どのような「像」として「創造」されようとしているのかを、「欲望」にそくして明らかにし、そこで何があらためて／あらたに創りだされ何が排除されようとしているのかを問うてからにしたい。そして、そのような問いに答えようとする自らをも問うことを忘れないようにしたい。（未完）

（広島大学）

※なお本稿続編は「論叢国語教育学」第4号に投稿した。